



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	サイエンスアゴラ2020のオンライン開催に関する報告
Author(s)	日下, 葵; 黒田, 明子
Citation	科学技術コミュニケーション, 29, 55-68
Issue Date	2021-08
DOI	https://doi.org/10.14943/99344
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/82478
Type	departmental bulletin paper
File Information	JJSC29_055-068_KusakaA.pdf



サイエンスアゴラ 2020 のオンライン開催に関する報告

日下 葵¹, 黒田 明子¹

A Report of Science Agora 2020 Held on an Online

KUSAKA Aoi¹, KURODA Akiko¹

要旨

サイエンスアゴラ 2020 (2020 年 11 月 13 日～22 日) をオンラインで実施した結果より、大規模な科学コミュニケーションに係るイベントのオンライン開催に関するメリットと課題をまとめた。テーマ「Life」の下で実施された 102 企画では、研究者からの COVID-19 に関する話題提供や、参加者同士の新しい暮らしに関する議論が行われたほか、オンラインの特性を生かした地域からの中継や現場ツアーが行われた。オンライン化により参加者数は増加し、その属性も多様化するなどプラスの変化があった一方で、会期の長期化で事務局業務が増大しており、企画数と会期のバランスの取り方を含め複数の課題も明らかになった。オンライン実施の費用は、特設サイトの設置や配信会場の確保、Zoom アカウントの払い出しなど、新たな運営項目が生じ、平常時と大きく変わらなかった。オンライン開催でもリアル開催と遜色のないように、出展者・参加者の利便性を追求しながら、より参加しやすい仕組みを構築するためには、同種のイベントの知見の蓄積・共有が欠かせない。

キーワード：サイエンスアゴラ、科学と社会の問題、オンラインイベント、科学技術振興機構

Keywords: Science Agora, Issues between science and society, online event, Japan Science and Technology Agency

1. はじめに

国立研究開発法人科学技術振興機構 (Japan Science and Technology Agency ; 以下, JST) が主催しているサイエンスアゴラは、2020 年、新型コロナウイルス感染症 (Coronavirus disease 2019 ; 以下, COVID-19) の影響を受け、初のオンライン開催となった。サイエンスアゴラ 2020 の実施概要は表 1 の通りである¹⁾。

本稿は今回のサイエンスアゴラ 2020 の実施から見てきた、複数日開催する科学技術コミュニケーションに係るイベントにおけるオンライン開催のメリットや課題、及び運営のための知見を共有することを目的とする。

2021 年 5 月 10 日受納 2021 年 5 月 26 日受理

所 属：1. 国立研究開発法人科学技術振興機構「科学と社会」推進部

連絡先：agora@jst.go.jp

表1 サイエンスアゴラ 2020 の実施概要

名称	サイエンスアゴラ2020
テーマ	Life
会期	プレアゴラ 2020年11月13日(金)～14日(土) サイエンスアゴラ 2020年11月15日(日)～22日(日)
開催 形態	オンライン開催(主催者企画は日本科学未来館, BASE Q, JST会議室を スタジオとして使用)
主催	国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)

※協賛, 特別協力, 協力, 後援は公式ホームページを参照のこと

2. サイエンスアゴラの概要

2.1 サイエンスアゴラの沿革

サイエンスアゴラは, 科学技術基本計画(現: 科学技術・イノベーション基本計画²⁾)の変遷とともに目的を柔軟に変化させながら, 2006年より毎年11月に開催してきた。現在は「科学とくらしとともに語り 紡ぐ未来」をビジョンに掲げ, 異なる分野・セクター・年代・国籍を超えた関係者をつなぎ, 「科学」と「社会」の関係をより深めていくことを目的としたオープンフォーラムと定義されている³⁾。

これまでのサイエンスアゴラの沿革は「草創期(2006年～2009年)」「第一次変革期(2010年～2013年)」「第二次変革期(2014年～2016年)」の3つのフェーズに整理できる。2017年以降については, 科学に対する関心拡大に加えて対話・協働の深化を重視し, 社会の声を研究開発の現場に届けよりよい未来への共創につなげる観点や, SDGsに代表される社会課題解決へのフォーカスを強めている特徴がある。会場は, 東京・お台場地区が中心である。2019年はテレコムセンタービル及び日本科学未来館で開催した。

表2 サイエンスアゴラの3フェーズ

草創期 2006年～2009年	第一次変革期 2010年～2013年	第二次変革期 2014年～2016年
・サイエンスが社会と交流し対話する広場 ・サイエンスを担う多様な人々の間の対話を促す広場 ・日本中のサイエンスコミュニケーター達が集い議論する広場	・サイエンスが社会と交流し対話する広場 ・サイエンスを担う多様な人々の間の対話を促す広場 ・日本中のサイエンスコミュニケーター達が集い議論する広場 ・各地のサイエンスコミュニケーション活動の環をつなぐ場となり, 多様なセクターが自律的に活動するネットワークへと発展 ・「伝える」とともに「つくる」へ広げる	・多様な科学コミュニケーション活動の「見本市」として全国各地域の科学コミュニケーションを活性化 ・日本最大級の科学イベント ・あらゆる人に開かれた科学と社会をつなぐ広場 ・科学とともにある社会をつくろうと「行動している人」が集まり, お互いの活動に関心を持ち, 仲間を募り, それぞれの活動を発展させていく場 ・社会とともにある科学, 科学とともにある社会

2.2 サイエンスアゴラの運営体制

サイエンスアゴラの運営は当初より一貫して JST が担っている。運営体制は主に 3 つの区分から成り立つ (図 1)。JST「科学と社会」推進部 (2018 年 1 月に科学コミュニケーションセンターから改組) の職員から成るサイエンスアゴラ事務局⁴⁾ が企画の運営全般を統括する。同部に所属する主催者企画設計担当者⁵⁾ が JST が中心となっていく企画等を担当し、サイエンスアゴラ全体のイベント内容のクオリティを担保する。また、JST が委託する外部業者が運営事務局を担い、出展者との連絡調整を行う。そして、主に外部からの有識者によって構成されるサイエンスアゴラ推進委員会 (以下、推進委員会)⁶⁾ が、運営方針の策定や企画公募の選考など、サイエンスアゴラに係る重要事項の検討を行う。

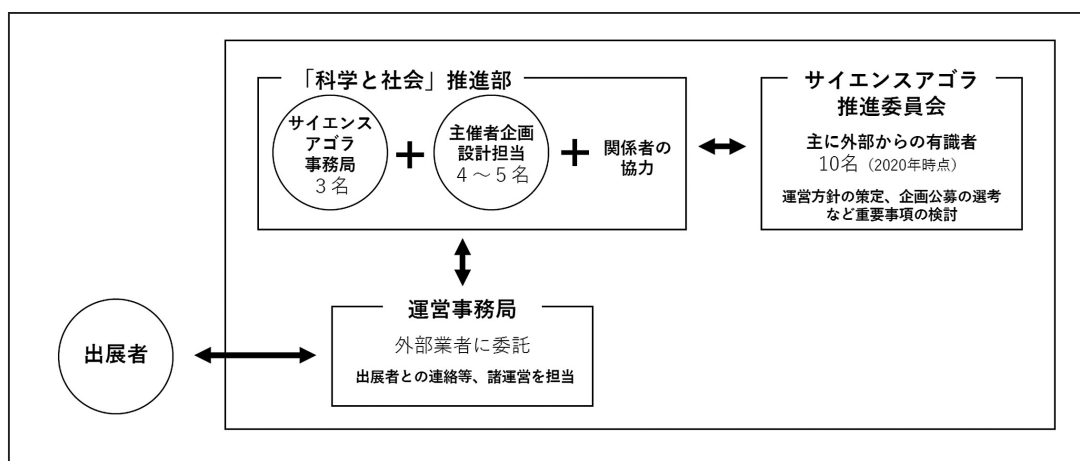


図1 サイエンスアゴラの運営体制図

3. サイエンスアゴラ 2020 の概要

3.1 経緯

サイエンスアゴラ 2019 終了後の 2020 年 1 月時点では、サイエンスアゴラ 2020 は従来通りの東京・お台場地区を中心とした会場での開催が検討されていた。しかしながら、COVID-19 に係る感染拡大防止対策のため運営方針を見直すべきと推進委員会からの指摘を踏まえ、2020 年 5 月にオンラインによる開催を決定した。例年より約 1 ヶ月後ろ倒しの 2020 年 7 月に、出展企画募集を開始した。

サイエンスアゴラ事務局及び JST にとって、オンラインによる大規模イベントは過去に経験がなく、当時多く開催が始まったオンラインイベントや、各推進委員からの助言を踏まえて、企画募集内容を策定した。オンライン化によって、どれくらいの応募が来るのか、どこから応募が来るのか、探り探りの募集となった。

COVID-19 で変動する社会状況を踏まえて、サイエンスアゴラ 2020 で参加者に何を語ってもらうのか、推進委員会で議論を重ねた。

3.2 企画募集時に検討したポイント

オンラインイベント運営の知見が蓄積されていない中での企画検討だったため、可能なことを少

しでも試し、良かった取り組みについては来年以降の発展を改めて検討するという姿勢で臨んだ。検討にあたっては、サイエンスアゴラ事務局、主催者企画設計担当、推進委員など、様々な関係者が当時のオンラインにおけるコミュニケーションのノウハウを調査し、知見を共有した。

COVID-19によって大きく動いた社会情勢、およびサイエンスアゴラ 2019 のテーマ「Human in the New Age—どんな未来を生きていく?—」の下で語られた対話を踏まえて、サイエンスアゴラ 2020 のテーマを「Life」とした。COVID-19 そのものに注目するよりも、人々の「Life」、すなわち、私たちの生命や生活、人としてのありかたと科学技術の接点についての考えを深めることを目的とした。

オンライン開催に伴い、2018 年から 2 万円としていた出展料金⁷⁾を無料とした。なお、後述するが、オンライン化によって開催に係る費用が削減された訳ではなかった。

オンライン企画の形式は、ライブ配信に加えて録画済み動画提供の 2 パターンの出展を用意し、それぞれ 40 分、90 分、120 分の 3 パターンの時間枠を設けた。オンライン化によって動画提供による出展が可能になったのは新しい点である。募集要項の中で実施目的や対象者によって適切な実施時間を提案し、オンラインイベントに不慣れな出展希望者へのフォローを行った。

主催者が懸念していたことは、サイエンスアゴラで最も重視している「対話」をオンライン上でいかに実現するかであった。上記の適切な実施時間の提案に加え、出展希望者へのフォローとして募集要項内には「審査の観点」として企画設計の考え方、およびセッション中の時間配分の例や、来場者とのコミュニケーションツールの提案を盛り込んだ(表 3)。また、録画済み動画の出展でも、会期中は SNS 等で視聴者からの質問を受け付ける体制を整えるよう求めた。

表 3 サイエンスアゴラ 2020 で提示した審査の観点

参加者と一緒に考えたいことを設定しているか
どのようにして参加者の対話を促し、意見を集められるか
参加者に提供できるものが考えられているか(参加者に新しい観点を与えられるか)
時間配分や関心度が異なる人への配慮が考えられているか
参加見込みのターゲット層への広報計画が妥当であるか

サイエンスアゴラ事務局 (2020b, 13)

また、オンライン開催となったことでどれだけの方に出展いただけるか不透明だったため、事前にメールでこれまでの出展者の方々宛てに、サイエンスアゴラがオンライン開催になった場合、出展するかどうかの意見を募った。

3.3 実施結果

サイエンスアゴラ事務局 (2021a, 8) によれば、サイエンスアゴラ 2020 の参加者数の合計は 11,448 名、出典プログラム数は 102 企画、開催期間中の総視聴回数は 25,979 回である(表 4, 表 5)。

参加者の属性及びサイエンスアゴラ 2020 を知った経緯について、Zoom 事前登録者の属性を元に集計を行った(図 2, 図 3, 図 4, 図 5)。なお、事前登録がない人も YouTube Live から視聴が可能であり、実際の参加人数結果と一致していない。オンラインイベントで参加者属性を収集する難しさについては、後述する。

表4 サイエンスアゴラ 2020 の参加者数内訳

来場者数※			出展者数	ゲスト	プレス	合 計
Zoomウェビナー 来場者数 (出展者除く)	会期中のYouTubeユ ニーク視聴者数	合 計	※サイエンスア ゴラ事務局除く	※オンライン含 まず	※オンライン含 まず	
2,612	7,962	10,574	854	4	16	11,448

※最終日 2020/11/22 17:30 時点

表5 サイエンスアゴラ 2020 の出展プログラム数, 合計視聴回数

ライブ配信	82企画
録画済み動画	20企画
合計	102企画
合計視聴回数 (のべ)	25,979回※
※Zoomウェビナー+YouTube	

※最終日 2020/11/24 9:00 時点

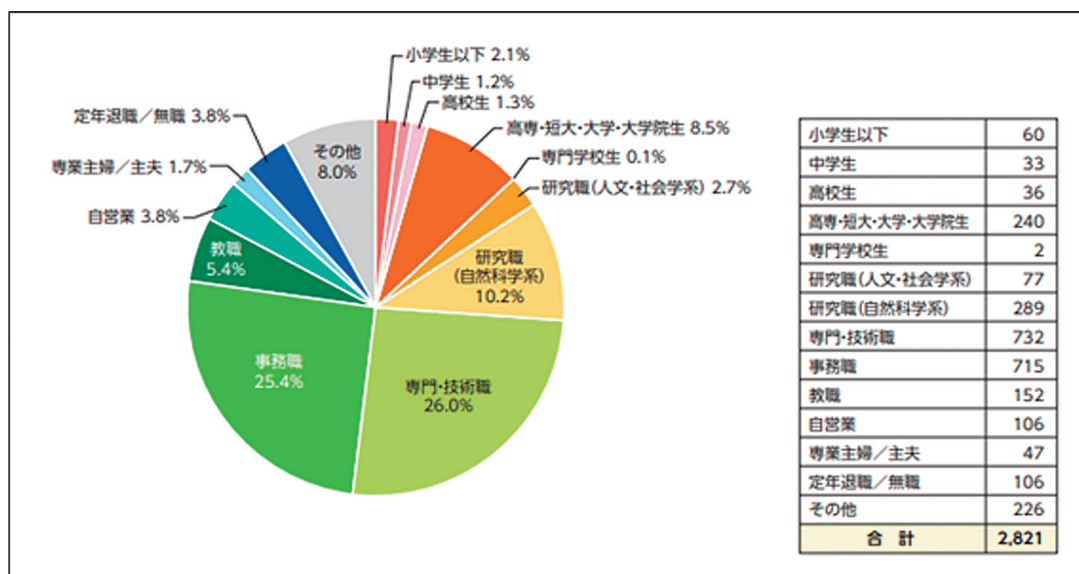


図2 サイエンスアゴラ 2020 参加者の職業別 (Zoom 事前登録者のみ)
サイエンスアゴラ事務局 (2021a, 9) より引用

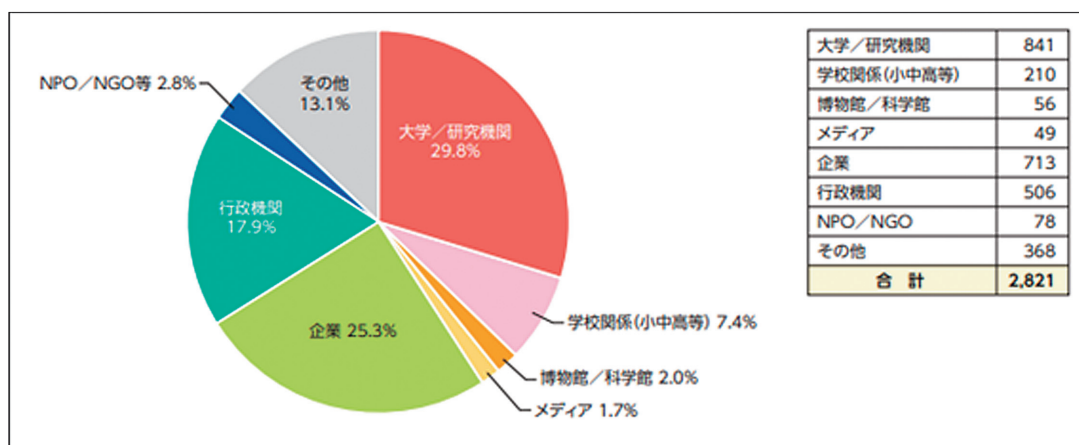


図3 サイエンスアゴラ 2020 参加者の所属機関別 (Zoom 事前登録者のみ)
サイエンスアゴラ事務局 (2021a, 9) より引用

4. オンライン開催のメリットと工夫

開催結果をもとに、JST 内部及び推進委員会にて振り返りを実施した。本章および次章は、この振り返りで出された意見が元になっている。報告の際には、今後類似のオンラインイベント開催を検討する団体・個人の参考に寄与すると思われる点を取り上げた。

4.1 参加者と参加地域の多様性の増加

サイエンスアゴラ 2020 は、オンライン化したことと、企画数確保のため平日から休日まで幅広い時間帯に企画を設定した。そのため、従来逃していた参加者を獲得することができ、視聴者数は 1 万人を超える結果となった(表 4)。サイエンスアゴラ 2019 の参加者数は合計で約 5,200 名だったため(サイエンスアゴラ事務局 2020a)、来場者はほぼ倍増したと言える。一方で、運営にかかる事務局の負担は増大した。後述するように、企画数と開催期間のバランスの取り方が改善点となる。

参加者数の増加の要因として、オンライン開催によって全国からのイベント参加が実現したことが考えられる。海外からの参加申込も見られた(図 4)。2019 年までは東京・お台場地区で開催していたことから、主に首都圏近郊からの参加者で構成されていた点と比較すると、サイエンスアゴラの理念である「あらゆる立場の人たちが参加し対話する」を実現するために、居住地・交通費・宿泊費のハードルを撤廃できたメリットは大きい。一方で、サイエンスアゴラ 2020 でも首都圏近郊の参加者が主な割合を占めていることは 2019 年までのリアル開催時と構成が大きくは変わらなかった。この結果は、これまで実施していたサイエンスアゴラに参加・関心を持っていた層が引き続き参加したためと推察している。今回のオンライン開催の実績を元に、次回より多様な地域からの参加を呼びかけたい。

4.2 課題解決と連携した出展

出展企画では、地域からの発信や現場施設の見学ツアーなど、オンラインの特性を活かしたのが見られた。その一例を表 6 に示す⁸⁾。従来のサイエンスアゴラでは地域課題解決を大きなトピックの一つとしていた。オンラインを用いることで地域課題解決の最前線からの対話が実現できたことは意義深い。

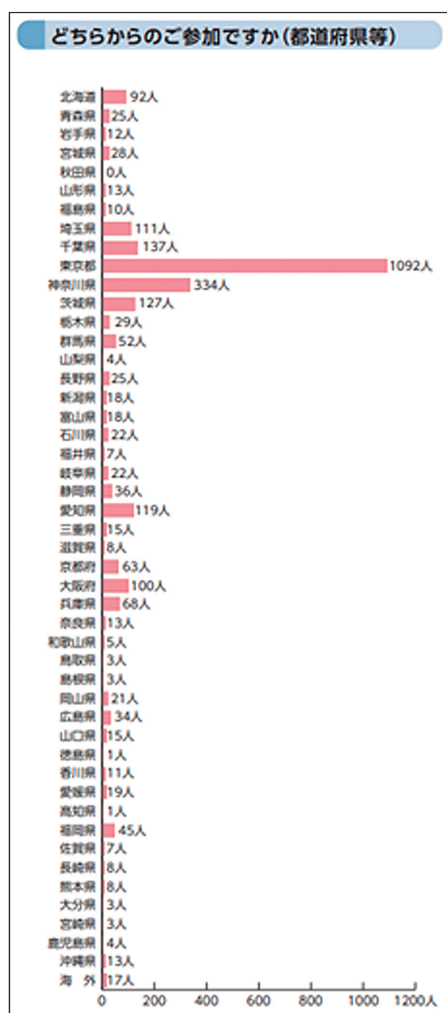


図4 サイエンスアゴラ参加者の都道府県等別 (Zoom 事前登録者のみ)
サイエンスアゴラ事務局 (2021a, 10) より引用

4.3 海外連携企画の増加

サイエンスアゴラでは海外連携の取組も進めており、今年も継続して複数の国から登壇者を招いた国際セッションを開催した(表7)。オンライン化により、例年よりも海外からの出展企画が微増した。Zoomの言語通訳機能を活用し、一部の主催者企画には同時通訳を導入した。一方で、費用の都合から、一般の応募企画の通訳については出展者自身での準備を依頼した。また、オンライン化に伴い移動を考慮しなくて良いため、国外の多忙な方々の登壇が容易になった。それに伴い、航空機・ホテル手配をはじめとした海外招聘に係る手続きを一部簡略化できた。これらのメリットの一方で、これまで以上に時差を考慮した登壇者の選定という課題が発生した。

4.4 研究者とともに考える企画の増加

サイエンスアゴラには、科学と社会の対話の場という性質及び政策的な要請から、より一層の研究者の参画が求められている。昨年は参加者の属性のうち「大学／研究機関」が15.2%だったのに

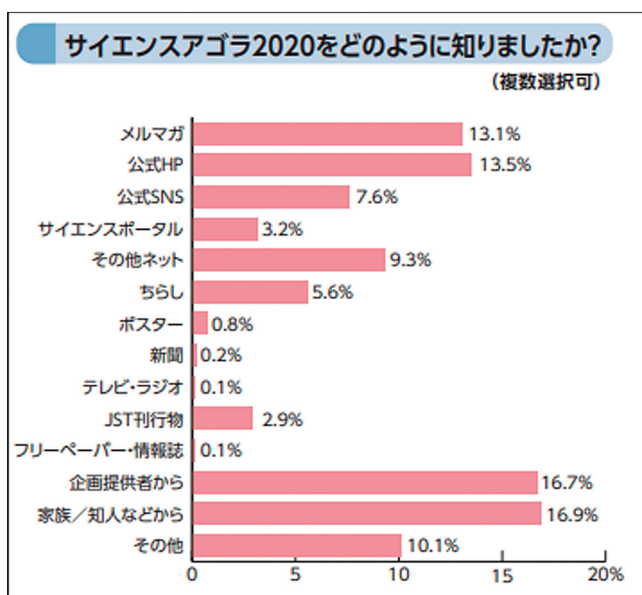


図5 サイエンスアゴラ2020をどこで知ったか (Zoom 事前登録者のみ)
サイエンスアゴラ事務局 (2021a, 10) より引用

表6 現場からの配信を行っていた企画の例

企画タイトル	出展者名
～京都の里山ライブ～SDGsライブ中継	京都超SDGsコンソーシアム
海に生きる:3.11からの10年とこれから	東京海洋大学 (東北マリンサイエンス拠点形成事業 TEAMS)
ライブ中継！最新技術で漁師町の未来をどう変える？	東京大学 生産技術研究所
JT-60SAバーチャルツアー ～世界最大の超伝導核融合実験装置を見にいこう！～	量子科学技術研究開発機構

表7 国際対応した企画の例

企画タイトル	出展者名	備考
開幕セッション	JST	日英通訳
地球の生命に光を当て、そして守る	ナショナルジオグラフィック協会, JST	英語のみ
危機対応における科学コミュニティの役割とは～ COVID-19パンデミックの教訓から～	JST	英日通訳

対し、オンライン開催の今年は29.8%と増加した(図3)。職業別では研究職(自然科学系)が10.1%、研究職(人文・社会学系)が2.7%、専門・技術職が26.0%である(図2)。研究者自身による出展も例年より増加している。企画申請時点で、研究者にとっても発信の場が限られていたことが要因の一つと考えられる。

また、本年の世情を反映した特徴として、研究者がCOVID-19の解説を直接的に行う企画や、COVID-19による研究環境の変化に着目した企画が複数見られた(表8)。

表8 研究者が語る COVID-19 に関連する企画の例

企画タイトル	出展者名
研究者と語ろう ～新型コロナウイルス(COVID-19)免疫学的視点×ウイルス学的視点～	大阪大学免疫学フロンティア研究センター、微生物病研究所
ポストコロナ時代の研究活動における情報共有 ～成果発表・学会～	科学技術振興機構 情報基盤事業部
国立研究開発法人協議会シンポジウム「with/postコロナ社会を生き抜くために」	国立研究開発法人協議会
人間と機械の共生が創る新しい生活様式	科学技術振興機構戦略研究推進部

4.5 テーマ設定の重要性

オンラインになることでJSTスタッフが全てのセッションに確実に目を通せるようになった。サイエンスアゴラ2020に出展された102企画は、いずれも多様な観点からテーマ「Life」を問い、根底で共通性を持ちながら多様な対話が行われた。自分事として考えやすいテーマ設定が功を奏したと考える。従来の会場参加がもたらす一体感・統一感を出すことができない今、多くの企画を扱う中でのテーマによるトーンセッティングの重要性が確認できた。なお、募集要項に明記されている通り、応募企画がテーマを反映させた企画になっているかどうかは、重要な審査項目になっている。

4.6 オンラインにおけるグラフィックレコーディングの実施

2018年度からサイエンスアゴラでは、事務局が選定する3～5個のセッションにおいてグラフィックレコーディングを導入している。グラフィックレコーディングとは、人々の対話や議論をリアルタイムでグラフィックによって可視化し(清水2017)、対話の活性化を促進するための手法である。本来は会の円滑な進行のための手法だが、本年はリアルタイムでの記録は行わず、結果のまとめ作成に的を絞って導入した(図6)。オンラインでの進行において、適切なタイミングでグラフィックレコーディングを参照・活用する高度なスキルが企画実施者に求められるためである。一見してどのようなイベントだったのか把握し難いオンラインイベントにおいて、参加できなかった人とも内容を共有できる振り返りの機能は、重要な要素である。本来のリアルタイムでの記録を活かした適切なバランスでの実施は今後の課題である。

4.7 サイエンスポータルを用いた報告記事の発信

JST「科学と社会」推進部が運営する「サイエンスポータル」の取材により、13本の記事を発信



図6 「開幕セッション」におけるグラフィックレコーディング

した。その内訳は3本のニュース記事、9本のセッションレポート、1本のハイライト記事である。これらに、出展企画登壇者のオピニオンとインタビューを加えた、特集『科学技術情報サイト「Science Portal」で読む サイエンスアゴラ2020』を編集し、公式ウェブページで公開している（サイエンスアゴラ事務局 2021b）。特に「研究者と語ろう ～新型コロナウイルス（COVID-19）免疫学的視点×ウイルス学的視点～」で話された内容をまとめた記事（内城 2021）が、Yahoo!トピックスに転載され、総合アクセスランキング1位（2020/12/25 17:20）となった。リアル開催時も同様だが、対話の結果の可視化に力を割くことの意義が改めて確認された。

4.8 ライブ配信企画のアーカイブ化

ライブ配信は原則としてアーカイブを行った⁹⁾。予定が合わなかった来場者にとってもアーカイブを通じた追体験を提供できることやアーカイブを活用して各出展者の活動拡大に貢献できることが、オンライン開催の大きなメリットである。それに伴う肖像権・著作権の扱いについて、事務局では最も慎重に準備を行った。機構内の法務・コンプライアンス課との入念な打合せや、過去の事例を参考に条件を整えた上で、出展者への同意書依頼等を実施した。

5. オンライン開催より明らかになったプログラムの改善点

5.1 開催期間とスケジュール

従来と同様に、十分なセッション数が配置できるような日程を検討し、プレを含めると11月13日から22日の10日間の開催とした。サイエンスアゴラ事務局が予定していた10日間の企画数よりも出展応募数は多く、そのため不採択となる企画も多かった。一方で、10日間の運営は事務局の負担が大きく、また参加者にとっても企画数が多くどれを見ればいいのか迷ってしまうという状況に陥った。また、多くの人が勤務をしている平日にどのような企画をどれだけ配置するかという課題も残った。平日の良さ、休日の良さを整理し、サイエンスアゴラ全体としての目的意識を明確にし

た上で改めて開催期間とスケジュールリングを検討する必要があることが明らかになった。

これらの改善点をもとに、サイエンスアゴラ 2021 は 11 月 3 日（水・祝）～11 月 7 日（日）の 5 日間で、また、プレアゴラをデジタルの日（10 月 10 日、11 日）に開催予定である。

5.2 主催者から出展者へ向けたオンライン対話実現のためのサポート

オンラインにあっても十分な対話を実現できた企画がある一方で、一方的な話題提供で終わる企画も少なからずあり、「対話」の実現度に大きな差が現れた。難しさの要因の一例として、ウェビナーを用いた場合、参加者の反応が見えないことから登壇者が話しにくく、場の盛り上がり時間に時間を要した点がある。それぞれの企画において対話を促進するためにも、主催者側は、チャット欄の活用、回答しやすい促しや、問いの設定を始めとした対話・議論の活性化について、募集要項や出展者の案内を通じて丁寧にサポートする必要がある。

一方で、オンライン環境を活かした対話を実現した企画も多く存在した（表 9）。好事例のポイントから、企画設計の重要性、ファシリテーターの存在等、対話性を確保するための工夫点が見出せる。これらの工夫を次回開催のサポートに用いていく。

表 9 オンライン下での対話の工夫が光った企画の例

企画タイトル	出展者名	ポイント
徹底討論！日本の有人宇宙開発 宇宙は人が行くべきか	日本宇宙少年団さくら分団	賛成派と反対派の議論につき、あくまで対話によって問題を解決。最終的にアンケート投票で結果を決める。反対派の意見も取り込んだ丁寧な設計。
弦巻楽団×北大CoSTEP 公演 インヴィジブル・タッチ	北海道大学 CoSTEP, 弦巻楽団	演劇の内容について、参加者がディスカッションしている間に、主催者からの説明を挟む。オンラインならではの時間配分を活かした構成。
食べる？食べない？ゲノム編集マダイ	ゲノム編集の未来を考える会	パネルディスカッション参加者が、研究者、行政、メディア、消費者の代弁者と多様。参加者とのコミュニケーションの時間を確保し、チャットと挙手による発言を漏らさず拾える体制（ファシリテーター＋アシストの役割を持った方）。

オンラインにおける交流の場づくりにも、課題が残った。今回はオンラインセッションが終了すると接続が切れる設定であった。振り返りでは企画終了後もオフラインのように立ち話やフリーな会話ができる場所の必要性が提起された。Zoom をセッション終了後も一定時間開放する、フリーセッションとして管理者がおり自由に誰でも入れることができる場を提供するなど、オンラインによる交流の場作りには改善の余地があった。

5.3 オンライン運営に係る費用負担

運営業者への委託、特設サイトの作成、配信スタジオの確保、参加者への Zoom アカウント払い出しに係る料金等、オンライン化に伴う業務の費用を勘案すると、運営に係る費用がリアルでの開催と比べて大きく削減されることはなかった。

なお、運営業者への委託業務としては、問合せ対応、出展者による企画配信に関わる業務、配信スタジオからの運営などを含めている。個人情報取扱の観点から、原則としての一元管理を実施している。

5.4 広報の必要性の増加

オンライン化に伴い、従来に比べてウェブ上で全国に対し広くイベント周知を図る必要が増加した。図5に示したように、メルマガや公式HP・SNS等の通常広報に加えて、本年はGoogleによる有料広告サービスを初めて利用した。図5中では「その他ネット」「その他」のいずれかに相当すると考えられる。

出展者や関係者のSNSによる情報発信にも効力が見られた。特にフォロワー数の多い、いわゆる「インフルエンサー」による発信には集客に大きな影響力が見られた。今後は出展者によるSNSでの情報発信により協力いただけるよう、公式ホームページにSNSで活用できるような画像を掲載したり、出展者へ画像の提供を依頼したりする等、効果的な広報への素材を増やす取組をする必要がある。これまでのイベントでも同様だが、特に幅広く周知する必要があるオンラインイベントにおいて、出展者によるSNS広報の協力は欠かせない。

5.5 Zoom と YouTube ライブの併用・公開による参加者の把握の困難さ

サイエンスアゴラ2020のライブ配信は、主にウェブ会議サービスのZoomで実施し、参加者の属性を調査するため開催日3日前までの事前申込制とした。あわせて、参加者の少なさを懸念し、当日視聴可能なYouTube Liveを設定した。

結果として、表3の通り多くの参加者がYouTubeからの視聴を選択した。企画実施者からは自身が実際にログインしているZoomの様子は確認できるが、YouTube Liveの参加者やコメントの確認までは手が回らず、実際よりも参加者が少ないと感じられていた様子が随所で見られた。事務局から出展者への、ツール併用に係る丁寧なアナウンスは課題である。

対話を行うためのZoomと、気軽に参加できるYouTube Liveにはどちらにもオンライン企画において一長一短がある。YouTube Liveの場合、企画者は視聴の傾向が把握できないため、参加者把握をした上での対話のデザインができない。一方で、Zoomへの事前登録者が実際に企画に参加しない割合も高い。参加者属性把握と、ツールの適切な利用の落としどころを検討する必要がある。

5.6 特設サイトを用いたプログラムの可視化の必要性

オンライン化に伴い、サイエンスアゴラ2020では企画を一覧できる特設サイトを設置した。各企画へのたどり着きやすさと、イベントの総括としてのサイトのあり方が異なることから、見せ方には苦労を重ねたが、タイムテーブルがわかりにくいという声は参加者から複数あがった。サイトの構成のあり方には課題が残る。

また、サイエンスアゴラの公式ウェブページは大幅なリニューアルを予定している。JSTではサイエンスアゴラ以外にも、対話の場の提供、共創を促進し社会の声を集めるための取組を実施している。従来のウェブページは出展者への情報提供を重視した構成になっていたが、リニューアル後は基本機能を維持しながら、来場者にとってもわかりやすく、定期的な対話イベントを掲載した、年間を通じた共創の場を提供するものになる予定である。

6. まとめ

サイエンスアゴラをはじめとした、数多くのイベントがオンライン実施への転換を余儀なくされた2020年であった。2021年以降もオンライン下での取組は続く中、科学技術コミュニケーションの実践にあたりオンラインだからできること、できないこと、オンラインだからこそ取り組まなければならないことへの知見の蓄積と共有は欠かせない。本稿で述べた通り、サイエンスアゴラ2020のオンライン開催にはメリットとともに多くの改善点が見出された。主なメリットとして、参加者と参加地域の多様性の増加、課題解決の現場からの対話の実施、研究者とともに考える企画の増加があった。主な改善点としては、開催期間とスケジューリングのバランス、出展者へ向けたオンライン対話実現のためのサポート、全国に向けた広報の強化があった。これらを踏まえ次回開催に向けて、本小特集にて展開される知見も大いに参考にしながら、あらゆる立場の人たちと共に創るサイエンスアゴラを実現するべく改善を重ねていく。

謝辞

これまでのサイエンスアゴラに参加いただいた皆様、企画に登壇いただいた皆様、運営に携わっていただいた皆様に深く感謝いたします。

注

- 1) サイエンスアゴラ2020を含め、各年度の報告はサイエンスアゴラの公式ウェブページで公開している、<https://www.jst.go.jp/sis/scienceagora/reports/>。本稿中の実施結果の詳細なデータはウェブページを参照されたい。
- 2) これまでの科学技術基本計画及び科学技術・イノベーション基本計画は、内閣府ウェブページに掲載されている、<https://www8.cao.go.jp/cstp/kihonkeikaku/index.html> (2021年4月19日閲覧)。
- 3) サイエンスアゴラの公式ウェブページに詳細が記載されている、<https://www.jst.go.jp/sis/scienceagora/about/> (2021年5月10日閲覧)。
- 4) 例年3名が担当する。類似のイベントを企画するときの参考として、人数を記載する。
- 5) 例年4～5名が担当する。
- 6) サイエンスアゴラ2020では10名で構成された。
- 7) 設営や設備使用にかかる費用の一部負担分としている。
- 8) 今後の表でも同様であるが、一部の企画を例として取り上げる。なお、サイエンスアゴラ2020の企画実施一覧は、公式ホームページおよび開催報告書(サイエンスアゴラ事務局2021a)を参照されたい。
- 9) 会期終了後、企画をカテゴリ毎に整理してアーカイブページを作成した、<https://www.jst.go.jp/sis/scienceagora/2020/index.html> (2021年4月19日閲覧)。

文献

- 内閣府 2020: 「科学技術基本計画及び科学技術・イノベーション基本計画」, <https://www8.cao.go.jp/cstp/kihonkeikaku/index.html> (2021年4月19日閲覧)。
- サイエンスアゴラ事務局 2020a: 「サイエンスアゴラ2019開催報告書」国立研究開発法人科学技術振興機構, <https://www.jst.go.jp/sis/scienceagora/reports/2019/doc/report2019.pdf> (2021年4月19日閲覧)。
- サイエンスアゴラ事務局 2020b: 「サイエンスアゴラ2020(オンライン開催)募集要項」国立研究開発法人科学技術振興機構, <https://www.jst.go.jp/sis/scienceagora/doc/guidelines2020.pdf> (2021年4月19日閲覧)。
- サイエンスアゴラ事務局 2021a: 「サイエンスアゴラ2020開催報告書」国立研究開発法人科学技術振興機構, <https://www.jst.go.jp/sis/scienceagora/reports/2020/doc/report2020.pdf> (2021年4月19日閲覧)。
- サイエンスアゴラ事務局 2021b: 「科学技術情報サイト「Science Portal」で読むサイエンスアゴラ2020」国

立研究開発法人科学技術振興機構, <https://www.jst.go.jp/sis/scienceagora/information/2021/scienceportal.html> (2021 年 5 月 14 日 閲覧).

清水淳子 2017: 『Graphic Recorder—議論を可視化するグラフィックレコーディングの教科書』ビー・エヌ・エヌ新社.

内城喜貴・サイエンスポータル編集部 2020: 「最新免疫学から分かってきた新型コロナウイルスの正体—宮坂昌之・大阪大学名誉教授」, https://scienceportal.jst.go.jp/explore/highlight/20201225_e01/ (2021 年 4 月 19 日 閲覧).